母子叙情小論

中野恵海

序

「母子叙情」は岡本かの子四十九才の時（昭和十二・一九三七）「文学界」三月号に発表されて異常な反響を呼んだもので、前年「文学界」六月号に発表された「鶴は病みき」でデビューして以来、賛否両論の喧しかつた文壇に、一平の所謂「一つの特定席を与えられた」その代表的作品である。

――私は三つの瘤をもつた駱駝だ。即ち小説と歌と仏教と。――

というのは彼女の有名な言葉だが、中で、歌の方は最も早く、与謝野寛、与謝野晶子の新詩社の流れを汲む女流歌人として世に知られ、二十四才（大正元年・一九一二）に青踏社より刊行された処女歌集「かろきねたみ」以来、四十一才（昭・四・改造社刊）の「わが最終歌集」までに四巻の歌集があり、更に、一たんは短歌とは訣別しながらも其の後も折々は制作し、死の直前まで「短歌研究」誌上に殆んど毎月発表していたのであつた。（然し歌集は遂に生前には纒めなかつた。）

次の、宗教の方は、彼女と一平との結婚生活の破綻がその契機となつたもので、東京・大和屋の大貫家の長女（第三子）として出生した彼女が、二十二才の折（明治四十三年・一九一〇）三つ年上の、当時一介の上野美校

生であつた岡本一平に熱願されて結婚したのであるが、両者の性格、成長環境の差違、加えて、二人の強烈な自己主張による理解の不足などが原因して遂に、かの子は強度の神経衰弱により入院、一方、一平も又、蕩児時代の再燃から遂に梅坊主に弟子入りして、カッポレ修行にうつつを抜かすと言つた、空白、苦悶の数年（彼女はしばしばその作品で、魔の時代と呼んでいる）を経て、かの子の主張によりその救いを宗教に求めるに至つたものである。最初は彼女の兄、大貫晶川の師、植村正久について、キリスト教に触れたが、やがて親鸞の「歎異鈔」に接し他力救済の世界に落着くに至つた。後、他の大乗仏教、法然、特に道元など、逐次研究の分野を広め、日本的特色の濃い鎌倉仏教開祖達の言行録から更に遡つて天台学の体系的研究や原始仏教にまでそれが及んだ。この間、原田祖岳師、新井石禅師らのもとに参禅した事や、高楠順次郎博士の指導で「大正大蔵経」の閲読にはげんだり、短歌の関係もあつて、九条武子夫人の知遇を得たりした事は注意すべき事であつた。此の方面に於ける彼女の業績は、十年近い勉学の期間を経て、彼女三十七才（大正十四・一九二五）仏教に関するエッセイ・コントを「禅と生活」「大法輪」などに発表した事に始り、著作には「仏教人生読本」「綜合仏教聖典講話」「観音経を語る」などがある。

然し、彼女の全生命力が最後に燃焼、結晶したのは勿論、小説であつて、如上の仏教的著作に没頭した昭和九年頃より着手し、亡兄晶川の関係などから、はやく交友のあつた川端康成などの手びきにより、本格的活動に入つたのであつた。

彼女の永眠は昭和十四年二月（五十一才）であるから、「鶴は病みき」以後四年、小説家たらんと意欲し出した

大正十年頃よりすれば、それは十数年にもわたることになるかも知れないが、「母子叙情」発表より、その小説家としての創作活動期間は、僅かに、二、三年という事になる。だが、杉山平助のいう如く彼女は「憑かれたような激しい創作意欲の赴くまゝに、奔放に多作し、僅か数年の間に多量の作品を残した」のであつた。

かの子の文学的特質は既に多くの人々によつて評定されているが如く特異ないくつかが挙げられるが「東洋の大母性的性格」はその一つである。こゝにとりあげた「母子叙情」はそれをうかがう為の最も直接的好適の素材と考えられる。以下はこの作品に即して夫等の点を考えてみたものである。

1　かの子と巴里

「母子叙情」の初めの方で、女主人公が、賢夫人で評判のある社交家の訪問を受けた話が書かれている。そして、その夫人に彼女の息子の巴里滞在についての質問を受ける。

――(註1)おちいさいのに一人で巴里へおのこしになつて……厳しい立派なおしこみですねえ。

――よくもねえ、さぞお骨が折れましよう。その代りにいまに大した御出世をなさいましよう。おたのしみで御座いますねえ。――

つまりこの夫人は、子供に厳しい教育を施し、その為に犠牲になつて子供に貢ぐ、世間普通の賢母と同列に彼女を置くという見当違いをやつて彼女を焦立たせ、にが〳〵しい思いをさせるのである。然し彼女は息子の世の中に生きて行く上の便利さからという意味での立身出世なら、それを望みはするが、親の身の誇りや満足の為な

ら、決して息子はその道具になるに及ばないと考える母親である。

「ではなぜか？」と彼女は自問自答してみる。そしてその結果、

――つまりむす子も親もあの都会に取り憑かれているのだ。(註2)――

と答えている。そして父、母、息子の三人で外遊に出て、遂に、息子一人を巴里に残して来た気持を説明して、

――むす子が深い決心の意気に燃えてまるで、勢い立つた若武者が戦場にあるようなものを、あえて引上げさすにしのびない。(註3)――

そんな思い遣りからだとして居り、又父の方はその事について妙に凄い顔付になつて、

――巴里留学は画学生にとつていのちを賭けてもの願いだ。それをおれは青年時代に出来なかつた。だからおれの身代りにも、むす子を置いて行く。(註4)――

と言うのであるが、これは彼女がそこに述べている如く、右の様な彼女の思い遣りも、いやに筋みち立つた父逸作の言葉の内容も実は矢張りかの女やむす子同様、巴里に憑れた者の心情を含んでいるからなのだとしている。この辺の彼女の説明は理路整然としていて「むす子も親もあの都会に取り憑かれているのだ」という言葉が生々と読者の心に泌み入る様である。この巴里を、それでは彼女はどうみているか。

――人間性のあらゆる洗練を経た後のあわれさ、素朴さ、切実さ――それが馬鹿らしい程小児じみて而も無性格に表現されている巴里。鋭くて厳粛で怜悧な文化の果てがむしろ寂寥を底に持ちつゝ取りとめもない痴呆状態で散らばつている巴里。真実の美と嘆きと善良さに心身を徹して行かなければいられない者が魅着し憑かれずにはいられない巴里――だがそこからは必ら(註5)

ずしも通俗的な獲物は取り出せないのだ。――

成る程この通俗的な獲物の最たるものが、多くの世間人達がいう所謂「立身出世」なのであろう。何という大きな違いである事か。こゝの所に彼女の言葉、

――置く者も置かれる者も、欲や見栄や、期待ではなかつた。もつとせつぱ詰つたあわれな心の状態だつた。――(註6)

が切実に生きて来る源泉がある。それにつづいて、

――所詮、かの女は、むす子と離れて暮さねばならなかつた。――

と洩らしているが、その意味は「芸術の孤独性」に関する問題であり、所詮芸術の道は一人で往かねばならぬものという厳しさに身を挺した者の言葉であり、自覚であり、その諦観であるに違いない。

――おかあさん、とう〳〵巴里へ来ましたね。――(註7)

この短かい言葉が又なんと適切に、そして用意深く挿入されている事か。彼女はこの言葉の本当の意味を手際よく表現し、物語つてゆく。「母子叙情」全篇を通じて、母としての記憶の中から選び出され、小説の中にはめ込まれた、これ等、むす子の言葉は、まるで、黄金の台金にちりばめられたダイヤやエメラルドにも似た輝やきを放つている。

挿入といえば、短歌もそれで、この作品の随所に挿入された短歌の適切さ、美しさ、その自在さは一寸類がない。それは、林芙美子が詩を小説にとり入れたのより一層出来栄えが良い様に思われる。多分、伊勢物語を易々と消化してしまえる彼女の日本文芸に対する教養の力と、与謝野晶子夫人にも似た軽妙にして流麗な作歌的才能

がそうさせているのであろう。

さて、この、まるで歌うようなこれ等の言葉は、この作全篇に漲る詩心の結晶の様な働きを持ち、この言葉の深さは正に一流の芸術作品のそれのように読者の胸を打たずには止まない。その純一さ、洗練さ加減、その肌合いのこまやかさは、感覚的な面に於て、川端康成のそれに似通うものをも私に感じさせる。

かの子の巴里観、それは、紀行文集「世界に摘む花」[註8]その他にも随所にあらわれているが、同じ賛美の仕方でも、永井荷風のそれや武者小路実篤、島崎藤村、横光利一のそれとは自ずから性質を異にする。かの子にはかの子独自の巴里把握があり、適確なその認識がある。

「母子叙情」は勿論巴里にある息子を思いやる母の心がその骨子になつているのだが、作中にしば〳〵巴里への回想が混る。モンパルナスのキャフエ・クーポールでの一場面、セーヌ河岸の春先の樹帯など。その素材は勿論、四年間の外遊から直接得たものであり、「世界に摘む花」にも纒められているものである（この中の一篇「雪」などは亀井勝一郎氏によつて立派に短篇小説と認められている。）現実描写とこれら回想的場面の描写の織り交りは夢幻的な情緒を呼び、むすことの幼き日の追憶描写などと共に、たつぷりとした情感をたゝえているものであるが、巴里というような一つの都市、フランスというような一つの国、その中核を鋭く適確に把握し、且つ豊かに表現してゆく場合、小説家として人間を観察し認識する、それと同断である。特に巴里に対するその認識や理解に於て、私達はその深い叡智に驚かされる。その気位と純情と聰明さとは遂に彼女の本性なのである。

「仏教人生読本」[註9]の序文に

――私の信仰する仏教は飽くまでも人間に対して親切で怜悧であります。――

と書いているが、何よりもさきに知見を重んずる仏教の本質を彼女も本然的に具えた人間であり、更に仏教によつて磨かれたものでもあろうか。若き母親の昔、赤ん坊を寝かしてあるのを忘れて、その部屋にあわてゝ這入つて来て、その赤ん坊にけつまずいて大さわぎした様なかの子。街を歩いても交通信号にうつかりして、同伴者をはら〳〵させる様なかの子。殆んど現実生活の些末的なものに対して無力であり、順応性がなく、痴呆的ですらあるかの子。そのかの子が、一平の言によれば、巴里などで外国の貴賓を招待するという様な場合は、どつしりと落着いて、悠々として、その貫録を発揮したという。大らかに、その生命的なもの、その中核を適確に把握してゆく場合の、叡智と聰明さは人間に於ては「鶴は病みき」をはじめとする、もろ〳〵の作品に、そして今巴里に対しては「母子叙情」に最も良くうかがえるものである。

2　太郎と一平とかの子

彼女のむす子の性傾観察の一つに、むす子が女性に対して一種の魔力のような、圧倒的な指揮権を持つているとし、その理由を説明して、

――かの女は、むす子が頑是ない時分からかの女の有り剰る担い切れぬ悩みも嘆きも悲しみも、恥さえもたつた一人のむす子に注ぎ入れた。――(註10)

――（その結果）むす子の女性に対する「怖いもの知らず」の振舞いの中には、女性の何もかもを呑み込んでいて、それをい

たわる心と、諦め果てた白々しさがある。――

と述べ、この「白々しさ」を実に委曲を尽して説明する。即ち

――そしてこの白々しさこそ、母なるかの女が半生を嘆きつくして知り得た白々しさである。その白々しさは世の中の女という女が率直に突き進めば進むほど、きつと行き当る人情の外れに垂れている幕である。冷たく素気なく寂しさ身に泌みる幕である。死よりも意識があるだけに、なほ寂しい肌触りの幕である。――

この人情の外れに垂れている幕、そして女が、いやしくも女に生れ合せたものは、愛をいのちとするものが本能的に知つている、いつか一度は世界のどこかでめぐり合う幕というのは何を意味するのであろうか。それは、人間愛欲の葛藤のその奥底、そして人間性の根底によこたわる本質的な不如意、と孤独性と、虚無を指すのではあるまいか。生命を賭けて求める者にしてはじめて立つ事を余儀なくされる、絶対的諦観、無力感、その絶望というものではあるまいか。生きの身に自覚されるところそれは確かに死よりもなほ寂しき肌合いのものではある。この白々しさに向つて立たせられるという事は、愛情の世界、いやいのちの世界に於て所謂一種の首の座に直るという事にも等しい事ではあるまいか。かの子は例の「仏教人生読本」の中で、「男が話の解つて来るのは、一度首の座に直つてからだ」という言葉をひき、それは絶望の極に立つ事であり、そこに己が力のみでは如何ともし難きもののある事を知り、我執の小世界を抜け出して、無限自在の力を得るに至ることだと説いているが、そしてそれとこれとは自から違う趣きのものではあるが、白々しき幕に直面する事は、愛情の世界、愛をいのちとする者の世界に於て、話の解る存在となる為の必須条件ではあるまいか。人生不如意は又信仰の入口でありその契

機たるものである。愛情不如意を痛感せし者にしてはじめて賦与される、泌々と人のいのちをひき寄せるその親和感。こゝに権威や指揮権を触発せしめる、いのちの秘密とその源泉があるのではあるまいか。かく解する時、彼女が息子に「諦め果てた白々しさがある」と述べるところこれは息子に対する賛美に類する表現であり、又彼女自身に対する、相当のプライドを含めた認識という事になる。

そして、かの子は又この白々しさの中の住人が実に巴里の紳士であると説いている様でもある。死よりも寂しい肌触りを溺愛し、「惚れるべき女優には花束を持つて惚れに行き、騙さるべき踊り子には指輪を抜くがまゝに抜かしめる」(註11)ボニ侯爵の如きをその一つの典型と見る様である。ぜいたくな、自らのほろびの支度を身につけている最高の文化人。これが巴里であり、そのシンボルであるというのであろう。こゝにかの子の、大乗仏教という東洋哲学を身につけた者の大きい理解が動くようである。勿論、虚無そのもので終りとする事のない一切空の世界を知るかの子は、空の世界の自在さ、その無尽蔵さ、そこより発する無限の積極性に立つ者たる事は勿論であり、巴里を凝視し、厳しく批評し、理解し、且つ愛する、たくましい力はこゝから出ているのだとも思われる。

然し息子に対するかくまでも徹底した深く細かい心理学が現実の息子太郎そのものに当てはまるか、どうかは又別問題であつて、彼女の場合そこには多分彼女の独り合点が、たつぷり作用しているとは思われる。かの子の「一平観」をこゝに採り上げてみたいが、例えば篇中顔を出す逸作という名で出て来る一平の姿は、話のよくわかる、人生わけ知りの粋人として描かれて居り、かの女をして「本当に私には勿体ない様なパパ」(註12)と言わしめている。かの子から見た一平の姿の良く描かれている作品、例えば「雛妓」を見ると、彼(註13)の少年時代は相当な美少

年で、だが鑿ち出しものの壺のように外側ばかり鮮やかで、中はうつろに感じられる少年だつた。その少年は自分でもそのうつろに堪えないでその界隈を酒を飲み歩き、女達は少年の心のうつろを見過してたゞ形の美しさだけを寵した。彼は世間態には先ず充分な放蕩児として成長し若くして市井の老人の様な心を持つ画学生になつた。彼は人生の寂しさを努めて紛らすために何か飄逸な筆つきを使うといつた画家で、都会児の洗練透徹した機智を持つている。彼自らはこう語る。(註14)「俺は元来うつろの人間で、人から充たされる性分だ。おまえは中身だけの人間で、人を充たすように出来ている」そして息子はこの「母子叙情」の中で「おとうさんのあの気位だとか純情だとかいうものはみなおかあさんのいのちから汲み出したものぢやありませんか」と言つている。かの子の一平観、それも又当然色濃い彼女の主観によつて塗り上げられていることであろうが、こゝで高村光太郎の「智恵子抄」、田宮虎彦の「愛のかたみ」が何か連想されるところであるが、岡本一平には「かの子の記」がある。前二著は夫々文芸作家がその専門の分野で完成した文芸作品で、「かの子の記」は文芸には素人の夫がものした手記であるが、自分の妻を溺愛し、礼賛するその熱情は同じことである。生きの身の、己が妻を「観世音菩薩」と叫ぶのが「かの子の記」のテーマであるが、己が夫をして、かく呼ばしめるかの子という女性、という風に読者は感ぜしめられる。「母子叙情」の中で夫婦が散歩に出た街頭の人混みの中に、むす子によく似た青年を見つけて、彼女がそのあとを追う場面がある。

(註15)——かの女がまるで夢遊病者のようになつて、「似ているのよ、あの子一郎に似てるのよ」などと呟きながら、どこまでも青年のあとに随き、なおも銀座東側の夜店の並ぶ雑踏の人混みへ紛れ入つて行くのを見て、「少し諄い」と思つた。しかし「珍し

い女だ」とも思つた。そして、かの女のこのロマン性によればこそ随分億劫な世界一周も一緒にやり通し、だん〳〵人生に残り惜しいものも無くなつたような経験も見聞も重ねて、今はどつちへ行つてもよいような身軽な気持だ。それに較べていつまでも処女性を持ち、いつになつても感情のまゝまつしぐらに行くかの女の姿を見ると、何となく人生の水先案内のようにも感じられた。――

かの子が自分の姿を、夫一平がこの様に見ているであろうという想像で書かれた文章であるが、このうがつた「かの子観察」を彼女自身どうして得る事が出来たのであろうか。この家庭では、一平自身の口から随分聞いたものであるかも知れないが、矢張り深い自己反省と自覚がなければこうは書けぬ筈である。一平としては、この様な人間心理、そして或は夫の心を、かくまで深々と掘り下げる、適確な鋭い叡智の前には遂に頭を下げざるを得なかつたろうと思われる。

3　母子叙情の本質

随筆集「池に向ひて」の跋に一平が、かの子が池を掘る事を好んだ事を叙してこう言つている。

――かの女が嗜むほどのものは世の常の好むというほどのことではなかつた。いはゞ生命の必需品だつた。愛しては愛し尽せぬ歎きに到るかの女の性質は、嗜むものに於ても生命的だつた。あるとき池の修繕をして水が濁つたことがあつた。かの女はそれを見ると自分の心意識も濁濁するのであろう。深い苦悩を訴へて、はたの見る目も傷ましかつた。家のものは驚き、急いで池の水更へをしてやつた。――（註16）

又例の作品「雛妓」はかの子の創作の或る秘密を説き明かす重要な素因を含んでいるが、父の死に絡んで一平がかの子に説いた「家霊」の話について次の様な描写がある。

――若さと家霊の表現、わたくしがこの言葉を逸作の口から不忍の蓮中庵で解説されたときは、左程のこととも思はなかつた。しかし、その後、けふまでの五日間にこのエスプリのたちまちわたくしの胎内に蠢り育つたことはわれながら驚くべきほどだつた。肉体の悄沈などはどこかへ押し遣られてしまつた。食べものさへ、このテーマに結びつけて執拗に力強く糸歯で噛み切つた。「そーら、またお母さんの凝り性が始つたぞ」息子の一郎は苦笑して、ときどき様子を見に来た。――(註17)

同書には又、かの女がいよ〳〵決心して歌よりも小説のスケールによつて家霊を表現することを夫逸作に表白した時、夫はこういう。

――「誰だか言つたよ。日本橋の真中で、裸で大の字になる覚悟がなけりや小説は書けないと。おまへ、それでもいいか」――(註18)

かの女はぶる〳〵震へながら、夫にもたれて言うのである。「そのとき、パパさへ傍にいて呉れゝば」。大上段に振りかぶつてこんなことをいう夫も夫であるが、身をふるわせるかの子は又何という女性であろうかと、何か凄惨な感じさえ受ける。彼女の小説の世界は、彼女のいのちの営みそのものと生々しく密着し、そのいきづきをじかに伝えて来るものである。

「母子叙情」を生む直接の素因となつた外遊は、かの子と一平の結婚生活が破綻にひんしていた所謂かの子のいう「魔界の一とき」の時、食も絶え、親しむ人も絶え、望みも絶えながら、はい出し盛りの息子太郎を遊ばせかねて、神気朦朧とした中に、謡うように「今に巴里へ行つて、マロニエの花を見ましようねえ。シャンゼリゼー

で馬車に乗りましようねえ」と言い暮らしたのが発端になつたのであり、すべてが一家三人珠数繋がりでなければ何事にも興味が持てなくなつている為の一家族あげての外遊であつたのである。一平の言によればかの子は巴里に一人残して来た息子太郎にあてゝ、幾度かその切ない心を手紙に書きつづろうとしたが、余りの激情が、文字にならず、文章にならなかつた。彼女は小説というこの芸術作品にそれをはめ込んで、はじめて、その心を托す事が出来た。それがこの「母子叙情」であつたと。ともあれ、かの子というこの大母性、後年の太郎の言によれば「ばくだんみたいな」(註19)女性が、息子とも、兄とも、愛人とも、その何れとも形容し難い肉体・生命そのものの様な息子との別離を余儀なくされたところから生れ出でた作品なのだという認識が何といつても重要である。

――凡そ女性の前に置かれる他の男性的領土――夫、恋人、友人、それらのどれ一つが、母に与えられたむす子程の無条件で厳粛清澄な領土であり得ようか。かの女はそれを何に向つて感謝すべきか。また自分よりも逞しい骨格、強い意志、確乎とした力を備えた男性という頼母しい一領土が、偶然にも自分に依つてこの世界に造り出された。その生命の策略の不思議さにも、かの女はつくゞゝうたれて仕舞うのである。――(註20)

「母子叙情」の一節である。母性というものの自覚乃至そのよろこびの世界を、領土という様な言葉までつかつて、誰がこのように表現し得たであろうか。かの子は言う。

――木の芽のような軟い心と、火のような激情の性質をもつた超現実的な娘が、これほど大きくなつたむす子を持つまでに、この世に成長したのは不思議である。そして芸術という正体の摑み難いものに、娘時代同様、日夜、蚕が桑を食むように喰み入つている。――(註21)

それは既に本能化したものである。盲目の偉大なる力である。かの子の言う如く、それが、今や、はね散つてむす子の上に烽火を揚げている。この「芸術餓鬼」が、われから、離し難い、むす子を一人巴里に置いての上での作品なのである。岡本太郎は、昭和卅三年六月号の文芸春秋で、こう書いている。

――かつては、父母と私と三人の激しく緊張した言葉のやりとり、その間に相互の愛情で調子高く充実していたわが家の雰囲気……。――

これら、三人――特異な、そして選ばれたる者としての強い自覚を持つた――によつて構成されている家庭、そのホームなるものの様相の一端が語り得られている如くである。

むすび

「母子叙情」の文芸的地位やその評価にまで筆を及ぼす積りでいて、余りにもこれは小論的であり過ぎた。「母子叙情」に於てその小説手法的欠陥の第一は、例えば作の後半、むす子に良く似た青年春日規矩男との交渉を叙するあたり、何か粗雑な日記的生活記録を読まされる様な感じがするし、規矩男の描写も、この作者の主観的説明の趣が強すぎる。それにしても最後の詩（長歌の様な趣きであるが）は規矩男に捧げられたものであり、これは確かに恋の歌と思われるが、何と神秘的な愛の様相ではないか。ユニークではあるが、やゝ難解であろう。河盛好蔵氏が彼女の作品解説の中で「たしかに岡本かの子は並々ならぬ烈しい情熱の持主ではあるが、しかし彼女の愛情には独り合点なところ、押しつけがましいところがある」[註22]と述べている。この作品に於ても、全身全霊を

挙げて生命の中核にせまるかの子の気魄には多くの人達は魂の痺れるばかりの感動を覚えはするだろうが、又或る種の読者にはまさしくその余りの芳香の強さに眩暈を感じさせないでもない。何よりもその彼女の「押しつけがましさ」のむき出しな点に生理的な嫌悪を感じてしまうのではないか。生理的といえば、その様な点とか、生生しいのは彼女の小説の第一の特徴なのではあるが、それが小説的手法の未熟さを通される時は大きな欠陥となるのである。初期の作品「鶴は病みき」の×夫人の観察や、傑作「雛妓」に於てすら、女主人公の感想の或物にもそれが伺がえる様である。然しこの小論で私が主張したかつたのは、この作品の第一のモチーフたる彼女の「東洋的大母性」の様相をうかがうという事の他に、かの子の生命哲学に何よりも力強くあらわれる、仏教的叡智についてである。かの女の作品にあらわれる妖しくも毒々しい絢爛豪華の色調は確かに一種の芸術派に属するものではある。然しそれは、天成の詩情をその本体とした永井荷風や、更に荷風の或る種の俗つぽい世界を見事に成長させた谷崎潤一郎のものとは著しい相違がある。即ちかの女が背負つた宿命的な長い魂の苦闘を経て来た「生命哲学」が彼女の作品の骨髄であるという事である。その観点に立つて彼女の生涯を思い、その短かかつた小説家としての活動期間に思いを致す時、それが未だ充分に小説に大成されなかつたという憾みが残る。然し乍らその「仏教人生読本」に盛られた仏教的叡智は激しい信仰心に支えられて独得の光を放つている。

矢張り、如上の意味に於て、かの子の文学は、何よりも個性的であり、日本近代文学の中にあつて「生命」をテーマとした「大母性」を提出する事に於て、例え未完成であろうとも、それは今後長く人々の心を捉えて離さないに違いないのである。

（完）

註
(1) 「母子叙情」・昭和十二・十二・十五・発行、創元社版・頁五・以後引用は同書による。
(2) 同書（頁八）
(3) 同書（頁十二）
(4) 同書（頁十三）
(5) 同書（頁十三）
(6) 同書（頁十四）
(7) 同書（頁二十）
(8) 物語紀行文集「世界に摘む花」昭・十一・三・一・実業之日本社版）
(9) 百華苑版（昭・廿六）
(10) 母子叙情（頁七〇）
(11) 世界に摘む花（短篇・雪・頁三十四）
(12) 母子叙情（頁七七……ほんたうに、あなたにも私にも勿体ないやうなパパ……。頁一一七「あなた先生を随分尊敬していらつしやるやうですね」「えゝ、尊敬していますとも」……。
(13) 小説集「河明り」（昭・十四・六・創元社版・「雛妓」・頁二〇〇）
(14) 同書（頁二〇一）
(15) 母子叙情（頁九三）
(16) 随筆・池に向ひて（昭・十五・十一・五・古今書院版・頁三三六）
(17) 河明り（頁二〇八）
(18) 同書（頁二五三）
(19) 「父の大いなる遺産異母弟妹たち」岡本太郎（昭・三三・六号文芸春秋）
(20) 母子叙情（頁一八〇）
(21) 同書（頁一六八）
(22) 筑摩書房版・現代日本文学全集45・（頁四一七）

——昭・三三・九——（本学講師　国文学）